

河内愛子
こうち

1

小学校の四年生だった。まっすぐ家に帰ってきた日は、おやつを食べると、わたしは本棚から自分の本を二冊つかみ出して、隣の菊田ふじこちゃんの家に行って行った。がらりと格子戸をあけると、茶の間の長火鉢の前に座ったお父さんが長い煙管で煙草を吸っていた。煙がゆるゆるとこっちにも流れてくる。別にいやではない匂い。側で縫い物をしていたお母さんは、わたしが手をついてコンニチワをするにこっとした。小父さんはいつだって、いらいらしている。近所の悪ガキが遊びに夢中になって菊田家の門の中に入りこんできて騒ぐと、小父さんは下駄をつっかけて飛び出し、どなりつける。「やがましつ。人のうちに入るなつ。病人いるんだぞつ」。そして逃げ遅れて尻尾になつた子を捕まえる。

「なんつ名前だ。くまがいが。そっちの長屋の三つ目が。父ちゃんに会ったら言つてやつかな」。

小さい子は泣きながら逃げて行く。おっかないおんちゃんだが、ふじこちゃんここに来るたった一人の友達だから、小父さんはわたしには怒らない。

わたしはさつさとふじこちゃんところに行く。床の間のある八畳の黒い鉄枠の高いベッドにふじこちゃんは寝ている。

「はい、これ面白いよ」

枕から少し頭を持ちあげ、『アンデルセンの雪の女王』と『クリスマス・キャロル』を見ると、ふじこちゃんは少し笑った。色白で桜色のほったたきをして目のぱっちり大きい少女である。

ほんとのところ、彼女は読み物にあんまり好きではない。好きなのは、日がな一日リリアンで両手の指を編棒のように使つてはしおりや壁掛けを作つたり、小さいビーズ細工の財布を編むのが好きなのだ。わたしたちは、あんまりしゃべらない。年の開きはああるけど、いつでもわたしは彼女のベッドの下の畳に寝ころんで彼女の本に熱中し、ふじこちゃんも好きな手芸に細長い白い指をいつも動かしていたから、部屋は静かなのだ。

要するに、わたしがふじこちゃんに運んでくる本は、菊田家に自由に出入りするパスポートみたいなものだった。

わたしが学区の小学校に入った年は、一九三六年の盧溝橋事件の年だった。五年生のふじこちゃん

んは毎朝手をつなぎ、小さい妹のようにランドセルの肩に手をかけて、教室まで送ってくれた。五年生のお姉さんは、一年生にとっては見上げる大きさと頼もしい。そのうえ、ふじこちゃんはほんとは六年生なのだ。

それなのに秋になると、彼女は迎えに来なくなった。わが家と彼女の家の境の小路を通る時、わたしはふじこちゃんが^持烈しく泣き叫ぶ声を聞いた。

「イタイヨ、イタイヨ、イタイヨ」

いつもにこにこしてやさしい彼女の泣き声は、耳をふさぎたかった。いったい何が？

母が教えてくれた。ふじこちゃんが五つぐらいの時、同じ年のつねちゃんと、裏庭のブランコで遊んでいた。菊田家のブランコだ。理由はわかからないが、ある時ふじこちゃんはブランコから落ち腰を打った。痛みはしばらく続いた。いくら昔と違って、レントゲンはあったと思うし、菊田家が病院に連れて行かなかったとも思われない。とにかく入学を一年遅らして、彼女は小学生になり、背も伸びた。五年生の秋、烈しい痛みが始まる。来る日も来る日も彼女は泣き叫んだ。股関節の結核性骨膜炎、立って歩ける日はこない、が病院の診断であった。

結核は恐ろしい伝染病であった。寝せておいてバターや卵のような栄養価の高いものを食べさせる以外に治せないのがあの頃の常識。見まわすと、三軒に一軒ぐらいの割合で肺結核の患者がいた。だが、バターや卵で骨膜炎は回復するのか。とにかく家族の懸命の看護で痛みは収まった。しかし

少女は上半身を起こすどころか、寝返りも打てぬ状態が続いていた。あちらこちらに同じような病人がいた。珍しくはなかった。

2

一九三九年九月、ヒットラーのナチスドイツが宣戦布告なしにポーランドに侵攻した。第二次世界大戦の本格的な始まりである。といっても、ヨーロッパはとてつもなく遠い。ふじこちゃん知らないのはあたり前だが、わたしの女だけの四年生のクラスで、それを話題にした人はいない。男子のクラスのことには知らないが、ポーランドは可哀想とわたしだけが一人で思っていた。ドイツは日本に負けず劣らず強い国で、ポーランドはあっさり降伏すると新聞も書いていたようだ。うちにはラジオはない。ただあの前後にベストセラーだった部厚い『キュリー夫人伝』をわたしの母は夢中になって読んでいた。キュリー夫人はポーランド人、ワルシャワ生まれである。そのマリール・キュリーの少女時代、ポーランドはロシアの支配下にあった。その時のエピソードをわたしは母から聞いていた。

ある日、ロシアの役人だか軍人が、マリール・キュリーの学校に視察にくる。教師はトップの優

等生のマリーにロシア語のあいさつだか、勉強の報告をするよう命ずる。マリーも教師も生徒たちもロシアは大嫌いだだが、彼らの心証を悪くしたら、怖い目に遭うのはわかり切っている。

マリーは立って立派なロシア語で話す。ロシア人はマリーをほめ、きげんよく帰っていく。口惜しさ、情けなさで、マリーは烈しく泣く。

外国に支配されるとは、こういうことなんだと母は言わなかったようだが、わたしはそう思った。人ごととして、第三者として思ったのだけれども。ドイツは同盟国で立派な国らしいが、ポーランドをひどい目に遭わせないでくれるといいとまでは思った。恐るべき無知である。知らないことは罪、知ろうとしないことは、それ以上の罪である。

3

父は経済におかまひなく、本を買う人だった。思いがけなく晩年に生まれた一人娘のわたしにも惜しみなく本を買ってくれた。ただし良書と限る。彼の判断による良書である。いくら欲しいと頼んでも、マンガ、少女小説、一年二年の頃大いにはやった講談社の絵本などは一冊も買ってくれない。腹立たしかった。ベビーブーム時代とどっちが上かわからないが、一九三〇年代の小学校も大

人数だった。仙台市の街中だったせいもあろうが、一学年は一クラス五十五人で五クラスあったから、全校生は千人以上いた。一クラスあたり三人ぐらいつつ本大好きの子がいた。本の中身はそれぞれであつたろうが、わたしの頭の中には、父が絶対買ってくれない、読むと叱られる本が置いてある友達の家のリストがしっかり存在した。

帰り道いつも一緒のじゅん子ちゃんの家には、いつも針仕事をしているシングルマザーのお母さんの愛読する『銭形平次捕物控』が何冊もと雑誌「主婦之友」がある。米屋の洋子ちゃんとふだんはそれほど仲良くはないのだが、たまたま学校帰りに一緒になり、米屋のお店の暗い階段を上がつたら大きいお兄さんの蔵書らしい金表紙の『江戸川乱歩全集』が並んでいてびっくりして倒れそうになった。学校がちがつて大して遊ばなくなった幼な友達の和夫ちゃんとは、「少年倶楽部」『宮本武蔵』『敵中横断三百里』とか、少年の血湧き肉躍る読み物がどっさりある。ふじこちゃんたちは三人のお姉さんが彼女に買ってくれた造本も美しい吉屋信子の少女小説の宝庫だ。わたしは五年、六年と進み、パールハーバーの大勝利で世の中が浮かれると並行して食べ物が日増しに足りなくなっていく時でさえ、入学試験の補習授業で放課後のわずかの時間も友達の家をわたり歩いてきた。おかしいことだが、甘い物みたいにわたしが飛びつく本に、その家の子は一ページも関心を示さなかった。和夫ちゃんの他は。

小学四年から五、六年にかけて、父は新潮社から出ている『日本少国民文庫』を全集全巻ではな

く十冊をぽつりぽつりと買って来た。一九四〇年から七十年以上もたった今、突然手もとに中の一冊『人間はどれだけの事をしてきたか(二)』(石原純著。あの頃の高名な物理学者、サイエンスライター)が残っていることに気づいた。どのようにして、熱心に読んだおぼえないこの一冊が出てきたのか全くわからない。たぶん人に貸したのがかなりたつて返されたのかもしれない。そしてこの本を手にとつてわかつたのは、『日本少国民文庫』は、既に昭和十二年に刊行されていたこと、この本は昭和十五年(一九四〇)五刷目に増刷されていて、父の字で「1939年クリスマス 山田愛子」と書かれていることだ。一九三九年なら昭和十四年だ。それはそれとして、日中戦争のさなか、パールハーバーの二年前に刊行されたこの本その他を父が買ってくれたことに深く心を動かされる。小鳥と花を美しくデザインした恩地孝四郎装丁のハードカバー、紙は良くないが写真は沢山入っている、ぜいたくな本だ。父の言うろくでもない本の読み歩きをする一方、わたしは文庫に入った『日本名作選』と『世界名作選』をくり返しくり返し読んだ。面白くて大好きだったのは、チェコの作家カレル・チャペックの童話とドイツのエアリヒ・ケストナーの少年向け「点子ちゃん」とアントン」だった。戦後しばらくして、わたしは二人ともがナチスに抵抗し迫害された作家であったことを知った。編者の山本有三氏はたぶん知っていて、あえてそれらの作品を選んだのである。一九四三年、わたしは女学生になったが、授業は全くつまらなかった。現在だつて似たようなところはあつたらうが。

『日本名作選』に収められた芥川や有島武郎の名短編の間に挿入されていた短歌や詩の方が、よっぽどよっぽど美しいと思つていた。

幾山河越え去り行かば寂しさのはてなむ国ぞ今日も旅行く

若山牧水

たはむれに母を背負ひて

石川啄木

そのあまり軽きに泣きて

三歩あゆまず

からまつの林を過ぎて、

北原白秋

からまつをしみじみと見き。

からまつはさびしかりけり。

たびゆくはさびしかりけり。

『世界名作選』のなかにある詩。

山のあなたの空遠く

カール・ブツセ

「幸」住むと人のいふ。

噫、われひと、尋めゆきて、

涙さしぐみ、かへりきぬ。

山のあなたになほ遠く

「幸」住むと人のいふ。

戦争早く終わらないかなあ、思うのはそればかりだった。早く終わって。でもたぶんこの戦争は永遠に続くのだろう。だが、はるかに早く戦争は終わった。わたしにとって最悪のかたちで。

4

それでもわたしは万障くりあわせて、菊田家の戸をあける。お父さんはいつも家にいる人だったせいか、町内会長に任命され、ますます威張る人になった。どこの家もだんだん貧しくなっているのに、なぜか菊田家の羽振りはよくなっている感じがあつた。町内会長が配給品の横流しで景気がいいなんてことはあるまい、そんなことしたら、たちまち密告が行くだろう。とにかく時々甘いビ

スケットなどをご馳走になるのは嬉しかった。わたしは十二歳だから、彼女は十七歳だ。家族じゅうから大切にされているから、ちっとも暗くない。よく笑う。彼女は姉三人、兄二人の末っ子だ。兄さんはずっと前、父と喧嘩して、うちにもお金を借りにきて、家を出て、今は家庭を持ってサイパン島で働いていると聞いていた。そのサイパン島に米軍が上陸した。海ぎわに追いつめられた一般民が次々崖から海に飛びこんで死んだという痛ましい情報が入って、わたしの両親もお見舞いに行つた。

「小さい孫たちが、どんなに怖い思いをしたかと思うと可哀想で」

とお母さんが言っていたという。それにしても菊田家は明るく景気がいい。少女小説の冊数はふえないが、『花物語』『紅雀』『桜貝』や中原淳一のイラストは殺伐な世の中と関係がない。ある時、ずっと前の「少女の友」が一冊紛れこんでいた。「少女の友」は戦争の旗振りの気配が少なくて好きな雑誌、古いほど好きになる。その時読んだ短い「石段の思い出」はストーリーも山もない文章なのに不思議に心に残った。思い出の主人公が自分と同年の少女だったからかも。よそのうちのなかに、彼女のベッドの脇の畳の上にごろりと寝ころんでわたしは読んだのである。

一人の女学生が学校からの帰り、いつも通る神社の石段を上っている。かなり高い石段。眼の前を重たそうな唐草模様の風呂敷包を下げた老婆が息を切らしながら上っている。大変そう、

持ってあげたいと少女は思う。ただ自分は知らない人にこっちから声をかけたことはない。おばあさんは、三段ぐらい行くと、ひと休みして息を吐く。ほらっ今だと思う。なのにできない。次のひと休みの時おばあさんはじろっと少女の顔を見る。できない。おばあさんの足はますます重くなってきた。ぜいぜい息切れの音がする。けれども頑張っておばあさんは上り切り、少女の家と反対の方角に行ってしまった。あの時の情けない哀しみを少女はいつも思い出す。

そういう文章だった。書いた人の名前は記憶に残らなかった。

『日本少国民文庫』は売れ行きがよかったのだろう。同じ山本有三の編集責任で、今度は『日本文学選』、『世界文学選』というタイトルの本の他にも父は『日本少国民文庫』の中で売り切れて買えなかった一冊をどこからか探してきた。

それは、作家・山本有三の著書だった。珍しく現代日本の中学一年生の男子四人が登場して始まるドラマだった。驚いたことには作の真ん中頃に、あの「石段の思い出」が入っていた。風邪か肺炎かで寝ている息子に母親が自分の思い出を語るところだった。一卷通しての物語だが、一章ごとに若い叔父さんの長いお話、それもかなりレベルが高くて難しいおしゃべりが入ってくる、ずいぶん変わった物語である。登場するのは中学一年生四人と女子大生の姉さん、母と叔父さんだけ。東京山の手(たぶん)の家庭の子どもたちの中に、一人だけ下町の豆腐屋の息子が同級生として交じる。

自分の環境と共通するものはほとんどなかったのに、物語は心をとらえて離さぬものがあつた。全部の文体に何ともいえない優しさがある。少年たちのおかれている学校の生徒を支配している上級生の暴力、これはよくわかる。それを絶対を受けいれぬと決意した少年たちのすがすがしい友情と見守る大人。実をいえば十四歳以来、わたしは一度もその本を手にとって読んでいない。それでも少年たちの名前や中学の上級生の体育会の暴力と、対峙する一年生三人、殴られる彼ら、出て行くきつかけを逃した一人の姿があり見えるのは、こういう暴力を知り尽くした人の描写の力であらうか。わたしは寝る時、枕元にその本を置くことにした。空襲で逃げる時は持って逃げようと思っていた。そこまで思い入れのある本は初めてであつた。

5

窓の外で、はずんだ母の音がする。

「ふじこちゃん、とうとう頑張ったねえ。よかったこと。おめでとう、おめでとう」

確かにおめでとうの価値はあつた。

八年間起き上がることもできなかった彼女が、花模様の^{あわせ}袴にもんぺ姿で、杖をつき満面笑って、うちの窓の外の地面に立っていた。お母さんと一緒に。空襲の時逃げられなかったら、家族は全滅

する。知らなかったけれど、どんなにか頑張って練習したのだろう。立てた。何歩かは歩けるようになった。奇跡みたいだ。

一方、わたしの父母はのんきで想像力に欠けていた。危ない怖い話には耳を貸さない。父は明治十五年（一八八三）生まれ。キリスト者でありながら、明治育ちの愛国者みたいところがあつた。米国・英国は侵略国だから、パールハーバーの勝ち戦には大喜びした。洋服は着たことがない。いつでも和服。敗けるわけではない、正しい戦だからと思つてゐる。天皇を神とはもちろん思つてゐないが、立派な人と尊敬している。けれども本に買った日付を書く時は西暦で書く。毎日、英語で聖書を読んでいる。しかし敗け戦がたてこんできた。心配だ。育てた愛しい若者たちが次々戦場にひき出される。彼らは生きて帰れるだろうか。いっぱい本を読ませ、やつと女学生になつた娘に学校は（国は）ほとんど勉強させない。娘は毎日、あんな学校はやめたいと文句を言う。勤労奉仕や、男子校ほどではないが厳しい体育訓練など、大嫌いな娘である。こんなはずではなかつた。教会にも信者はほとんど来ない。幼稚園は評判がよく順調に発展してきたが、明日にも空襲があるかもしれない、一刻も早く閉園すべきだ。

いくらのんきであつても、父（と母）の心には葛藤と不安と現実問題が山積していた。反戦を唱えているわけでないから、投獄される心配は今のところない。しかしサイパン島を発進する戦略爆撃機が各都市を焼き払いつつあつた。軍需工場に行かされてゐるわたしに数学を教えるために、父

はいろいろ勉強を始めた。若い時、彼は女学校の数学教師であつた。人々が家族や家財の疎開先を必死に考えていた時、父親は国に学ぶことを奪われて生きる娘の勉強に気をとられていた。見当違いとしか考えようがない。軍需工場から疲れて帰る娘と父が暗い灯りの下で膝つきあわせて数学の勉強をはじめ一カ月もたなかつた。爆撃機B29百二十余機が七月の夜ふけ、仙台市を無差別爆撃、一万一千戸以上を焼き払い千人が死んだ。

闇の中、読み続けてきた英文の聖書をうろろ捜して父は逃げ遅れ、母は娘をかばつて全身やけどをして三週間後に死んだ。父と英文聖書を一緒に捜していたら、今、わたしは存在しない。あの一冊のほか枕元に大切な何をおいていたか、着の身着のまま逃げたことのほか、記憶は全くない。

（次号に続く）